

みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

広域経済システムとウデへの狩猟

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 史郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5532

広域経済システムとウデへの狩猟

佐々木 史郎

一 序

かつて「狩猟採集経済」^[1]といえば、閉鎖的、自給自足的な最低、原初の経済形態とされてきた。経済学や人類学の学術用語としても長らくそのような意味で使われてきたし、現在でも一般的にはそのような意味で使われることが多いだろう。確かに農耕が始まるまで、人類は動物を狩り(あるいは魚を捕り)、植物を採集することで食料を得ていたのであり、それが経済活動の中心ではあっただろう。そのような形態の経済活動は農耕を主体とする経済形態の広がりによって急速にせばめられ、約一万年前までは一〇〇%が狩猟採集民であったものが、西暦一五〇〇年頃には人類の人口の1%になり、一九七二年には〇・〇〇一%にまで下がってしまった。しかも一五〇〇年までは面で分布していたものが、現在は点でしかその分布を表せない [Lee and De Vore 1979 : ii]。

近代、現代の狩猟に関する研究は古い時代の状況を再現するための手段として、考古学と結びつくことが多かった。農耕以前の遺跡を研究する考古学者は、その社会、文化を復原するためにしばしば自ら現在の狩猟採集民を調査したり、関

係する資料を多く援用してきた。彼らは現在の狩猟採集民たちの狩猟方法、資源管理、社会組織、居住形態などを遺跡や遺物と比較しながら、土の中に残らない部分も含めた古い時代の社会、文化を復原しようとしてきたのである。しかし、そこにはかつての「進化論」あるいは経済形態の「発展段階論」のにおいが濃厚に感じられるケースが多かった。例えば狩猟漁撈採集が主要な生業だとされてきた日本の縄文文化の場合でも、土器の形式や文様の比較による文化圏のような議論は生じても、その経済形態や社会構造は原初的なもので、しかも閉鎖的、自給的であるという考え方が主流だった。

近代、現代の狩猟採集民に関する研究についても、彼らを閉じた経済体系の中において分析することが多かった。『マン・ザ・ハンター』でリーとデ・ヴォアが指摘したように、「更新世の経済を厳密に守っている人々、つまり、金属も火器も犬も狩猟民以外の人々との接触も持たない人々」[Lee and DeVore 1978a: 4]が「理想的な狩猟採集民」であると考える考へ方に立てば、必然的に狩猟採集民は閉鎖的、自給的な社会経済システムの中で生きていることを前提にすることになる。しかし、すでにリーとデ・ヴォアも認めるように、現在では（マン・ザ・ハンターのシンポジウムが行われた一九六六年の段階で既に完全に更新世（つまり旧石器時代）の頃の人々と全く同じ自然、社会環境に暮らす人々は、ゼロとはいわないまでも、皆無に等しい。したがって、現実問題として、そのような「理想的な狩猟採集民」（あるいは「純粋な狩猟採集民」）を研究することは不可能である。

しかし、非狩猟採集民との接触、あるいは濃厚な交流をもちながら、もっぱら狩猟採集活動で生きてきた人々を、このような消極的な理由からのみ研究対象にすることが、はたして妥当なのだろうかという疑問を私は抱いている。「純粋な狩猟採集民」の研究をめざす人々は、その代替として非狩猟採集民との交流をもち、狩猟採集産品以外のものも口にする人々を研究するのであるが、もつと積極的な理由から、そのような人々に関する研究も「狩猟採集民研究」の一分野として入るべきではないだろうか。

資本主義のような広域にひろがる経済システムに巻き込まれたり、国民国家の一員とされたりなど、周囲の非狩猟採集民との接触、交流、働きかけを通じてその狩猟採集的だった社会や文化を変容させつつある人々を「狩猟採集民」として積極的に研究対象とすることができるという考え方は、例えば、ピーターソンと松山利夫が編集した *Cash, Commodity*

-ization and Changing Foragers (1991) やスチュアート・ヘンリーが編集した『採集狩猟民の現在—生業文化の変容と再生』(一九九六年) の中で打ち出されてくる [Peterson 1991: 1-16; スチュアート 一九九六年 a・三—一〇・一九九六年 b・一二六—一二七]。そこではオーストラリア、アフリカ、インド、北アメリカなどにかろうじて残された現代の狩猟採集民、あるいは資本主義的な経済システムの浸透によって一九世紀以来急激な変容を余儀なくされた元狩猟採集民たちの社会、経済、文化の現状を分析しているが、その立場はもちろん、現在の彼らの社会が孤立したのではなく、広域の社会経済システムの一部であることを前提としている。これらの著作でとりあげられた諸問題は現代の狩猟採集民(あるいは近い祖先が狩猟採集で生きていた人々)の現状を分析する際には避けて通れない基本的な問題である。

しかし、世界中の狩猟採集民が資本主義と出会うまで広域の経済システムと出会ったことがなかったというわけではない。また、近代国民国家に支配されるまで、国家の支配を受けたことがないというわけでもない。少なからぬ人々が、ヨーロッパ人と出会う前に、すでに前近代的、非資本主義的ではあるが広域にひろがる国家や社会経済システムに出会い、巻き込まれ、それに適応するために自らの社会、文化を変容させてきた。もちろん狩猟採集活動のあり方も変化させた。

例えば、王朝時代の中国のような巨大帝国は自らの周囲に広大な経済圏を形成する。それにはさまざまな人々が巻き込まれているが、その中には当然狩猟採集民も含まれる。彼らは狩猟採集産品をもって帝国の広域経済システムに参画し、帝国がもたらす豊かな物資の恩恵を受けていた。それによって狩猟採集民であることをやめる人々もいたが、他方では農耕や牧畜に手を出さず、あるいは以前していたのをやめてまで、狩猟採集に専念する人々までいた。前記の「純粹な狩猟採集民」の定義によれば、狩猟採集産品以外のものを多く口にしたり手にする彼らはもはや「狩猟採集民」とは呼べないことになる。しかし、ヨーロッパ人が近代という時代をもたらすまで、彼らが狩猟採集活動を最も重要な生業として、あるいは専業として生きてきたこともまた事実なのである。

「近代的」、「前近代的」を問わず、広域の政治経済システムに巻き込まれた狩猟採集民は、狩猟採集という活動の中でも特に商業的な狩猟採集、つまり、外部世界の物資と交換可能なもの、あるいは換金作物を得るための活動を発達させ、実生活でもそれに大きく依存してきた。それは外部世界との交渉があれば必然的に生じる現象である。しかし、「広域経済

システム」とはいつても、地域や時代によってその内容は様々であり、それに参入する狩猟採集民の参入戦略もそれによって当然異なる。

本稿では紙幅の関係で「広域経済システム」の定義を細かく議論することはできないが、暫定的に、圧倒的な生産力を誇る国家あるいは地域が、周辺にその経済的な影響力を拡げた際に形成される一つの圈を支える経済機構としておこう。本稿では広域経済システムの例として王朝中国の朝貢を柱とした前近代的なシステム、ソ連時代の社会主義的な経済システム、そして一九世紀以来西ヨーロッパとアメリカ合衆国によって世界中に拡大された資本主義を柱とした経済システムを扱うことになるが、いずれも圧倒的な生産力を誇る国または地域がその中核にあり、かつそこを中心として形成される经济圈が地球の陸地の数分の一という広大な地域に広がっている。私の本稿での論点は、この三つの広域経済システムが時代毎に交替するということを経験した、狩猟採集活動を専業とし、自分たちのアイデンティティの基盤と捉えてきた一つの民族集団が、それぞれのシステムに対していかなる戦略を持って参入しようとしたのか、そして彼らがシステムの側からどのような反応を受け、それによって彼らの経済生活がいかに変化していったのかというところにある。そして、両者の相互関係の変化を時代を追って見ることで、広域経済システムにおける狩猟採集活動の可能性と限界を明らかにしていく。

本稿ではシベリア、ロシア極東の「狩猟採集民族」といわれてきたウデへと呼ばれる人々を中心に上記の論点について論じていく。彼らに関しては私自身が一九九二年、九五年、九六年と三回にわたって狩猟慣習に関する調査を行った。調査期間は三度とも二週間強と非常に短かったが、インフォームメントに恵まれたことと、彼らに対する集中的な聞き取り調査ができたことにより、期間の割には非常に多くの情報を得ることができた。本稿ではその時に収集されたデータと中国とロシアに残されている歴史文献と民族誌データなどを分析材料とする。なお、本稿は紙幅の関係で十分な議論ができないため、予稿的なもので終わる予定である。

二 ウデへ概略

ウデへ（ロシア語では Удэ́кы）は日本海を挟んでちょうど日本の対岸に当たるロシア沿海地方（Приморский край）のシホテ・アリン山脈の中で暮らす人々である。その居住地はウスリー江の右岸に注ぐ支流の奥と日本海に注ぐ河川の流域と河口周辺で、今世紀初頭までは家族や親族、あるいは氏族（ハラ）単位でキャンプを作り、猟場や漁場を使いながら、現在の沿海地方からハバロフスク州南部にかけての地帯に広く分布していた。しかし、今日ではホル川流域のグワシユギ（Гуашиги）、ゴキン川流域のクラースヌイ・ヤール（Красть Яр）、サマルガ川流域のアグズ（Агуз）などいくつかの村落に固まっているに過ぎない。それは、一九世紀後半以来ロシア、中国、朝鮮方面からの移民が大量に流入して、森林と河川を開発してしまったことと、旧ソ連の集団化・集住化政策のためである。

人口は一九八九年の統計によれば一九〇二人であるが、そのうち固有言語（ツングース系の言語のひとつであるウデへ語）を母語とするものは二四％程度に過ぎない。自由に操れるのは七〇代、八〇代の老人たちで、六〇代で既にロシア語の方が楽になっている。四〇、五〇代ではいくつかの語彙を知っている程度であり、三〇代以下ではもはや語彙すら残されていない。若年世代はロシア語のみで生活している。かなり強力な言語保存政策を実施しない限り「ウデへ語」は死語になる可能性が高い。狩猟方法に関しても、一九二〇年代まではしばしば見られ、民族誌に記されてきたような方法は、数少ない故老をのぞいてはほとんど忘れられ、全ロシア共通の道具や方法が普及している。ただし、個別には意識、無意識にかかわらず、古い方法が生きているケースもある。

ウデへに関する人類学的あるいは民族学的な調査研究は少なくない。既に一九世紀にはЛ・シユレンク、Р・К・マールク、С・Н・ブライロフスキーが調査報告を残し、今世紀にはいるとВ・К・アルセーニエフ、И・А・ロバーチン、F・アルベルト、Ю・А・セム、В・Г・ラリキン、最近ではА・スタルツェフ、В・В・ポドマスキンなどが調査報告や研究論文を残している。それだけに彼らに関する民族誌的な情報はかなりの蓄積がなされているはずである（ただしその大部分がロシア語、稀にドイツ語で書かれているために、日本の狩猟採集研究者の間ではほとんど知られていない）。しかし、ウデへだ

けを対象とした専門書はあまり多くなく、一九五八年にラリキンの『ウデへ』(Удехи)が出てから暫くなかった。一九八九年によくА・И・クルシャーノフが編集した『ウデへの歴史と文化』(История и культура Удехцев)が出されたが、その後は一九九一年のポドマスキンの『ウデへの精神文化』(Духовная культура Удехцев)、『一九九六年のスタルツェフの『ウデへの物質文化』(Материальная культура Удехцев)と続けてウデへ関係の著書が出版されている。

ウデへも世界の多くの狩猟採集専門の人々と同じく、その経済形態については閉じられたシステムの中で考察されることが多かった。例えば、沿海地方の先住民民族研究を専門としていたラリキンは、一応毛皮獣狩猟や朝鮮人参採集が中国やロシアの市場に売るためであることや、彼らの物質文化に中国やロシアの影響が色濃く見られることは指摘してゐる[Даркин 1958: 12-14; 17-19]。しかし、前者は狩猟採集活動の一部、後者は衣文化における文化交流として説明していて、両者を有機的に結びつけることはしていない。それは、結局はウデへの経済形態を閉じた系として考え、毛皮や人参の取引はその系から外部にのばされた触手ぐらいにしか見ておらず、彼らの生産活動を広域経済システムの一部として捉えることができいないからである。

それは彼らの経済だけでなく、他の文化特性についても同様で、例えば、彼らの精神世界についても、シャーマニズムの世界については詳しく語られるが、明らかに中国由来の信仰である「ミオ」⁽³⁾についての情報はきわめて少ない。それはロシア系の調査者がミオのようなものに理解がなかったことも関係するが、国際政治の影響も大きく、冷戦時代には中ソ関係の悪化にともなつて、ソ連では極東の先住民と中国との関係について触れるのがタブーになつていたことも事実だろう。しかし、そのようなタブーも解けた今日では、ソ連の民族学者が好んで描いてきたいわゆる伝統文化も、中国を中心とした東アジア世界の中に正當に位置づけなければならないはずである。

三 中華世界の中のウデへの狩猟

ウデへと中国との関係は文化交流というレベルではなく、国家に取り込まれ、彼らの活動がその政治、経済、社会のシステムの中で機能するというレベルであったことは、彼らの間に残された様々な中国由来の物質文化、信仰、ことばなど

によく残されている。そして、中国側に残されていた文献資料も彼らを国家システムの中に取り込んでいたことを証明してくれる。

シホテ・アリン山中に在る狩猟漁撈採集を専業とする人々について直接言及している史料は一七世紀までない。それまではおそらく、この地域の人々も含めて言及しているのだろうというレベルの記述しかない。例えば、一五世紀の明代には「ウディゲ」(udige、*udige*、漢字では「兀狄哈」などと記される)と称する人々が、文献に登場する。ヌルガン、現在のティール村近傍に建てられていたといわれる永寧寺の碑文によれば、このウディゲの訳が「野人」(「野人女直」)だった[叢佩遠・趙鳴岐 一九八五・一八七]。このことばはツングース語で解釈すれば、「森の人」という意味であり、現在のウデへと語源的には同じである。しかし、明代ではその指し示す人々の範囲は現在のウデへよりもはるかに大きく、松花江下流、牡丹江流域、烏蘇里江とその流域からアムール川下流にかけての人々を広く指し示している。また、朝鮮の史料では、とくに牡丹江流域、松花江下流域の人々を指し示すことばとして使われている(「李朝実録」など)。この「ウディゲ」の中には現在のウデへの祖先も含まれていた可能性はあるが、それは、彼らだけを意味する言葉ではなかった。したがって、ウデへの祖先が明代以前に中国の政治経済システムに直接含まれていたことを示す史料はない。

しかし、ウデへに残された伝承の中には、明代以前に彼らの祖先が中国の政治経済システムに含まれていた可能性を示唆するものもある。例えば、筆者が一九九二年二月のクラスヌイ・ヤールでの調査で耳にした伝承の中には、モンゴル軍との接触を示唆するようなものがあった。それは、彼らの狩の装束に関するもので、彼らの狩の帽子の頂にクロテンやリスの尾を飾るのは、モンゴル軍の兜にヒントを得たからだというものであった。それが本当に元代のことを物語っているのかどうかは証拠はないが、その頃にすでにウデへの祖先がモンゴルなど中国からの勢力の中に包含されていた可能性は皆無ではない。

しかし、ウデへの祖先が中国の直接の統治下に入ったのは清代以降である(清は満洲民族が築いた中国最後の王朝、一六一六年～一九二二年)。

清代の文献、例えば一七世紀末期に成立したとされる楊賓の『柳邊紀略』には既に、今日のロシア沿海地方に当たる地

域に「欺牙喀喇」（キヤカラと読む）と称する人々がいて、毎年毛皮を貢納しに現れることが記されている（楊賓 一九八五・二五一）。時代が下つて一八世紀中期に大学士傅恒たちによつて編纂された『皇清職貢圖』にも「恰喀拉」（同じく「キヤカラ」の漢字転写）という人々が登場し、今日の沿海地方南部に住み、漁撈と狩猟でもつて生計を立てているほか、服飾などについての解説があり、やはり毎年貂皮を貢納していることが記されている（傅恒 一九九一・二四八―二五〇）。そして、ウデへの居住地域も含む、アムール川流域と樺太の住民に対する清朝の統治に関する一次資料（檔案）と呼ばれる行政府の残したファイル類）にも、「キヤカラ・ハラ」（*Kiyakara hala*）、「バンジルガン・ハラ」（*Banjirgan hala*）という名称でウデへの祖先に当たたる人々が登場する。この二つのハラ（氏族）の人々は四五戸が毛皮貢納民として登録され、二年に一度ずつ烏蘇里江右岸の支流であるニマン川の河口に設けられた清朝の出張所まで、クロテンの毛皮を貢納しにやつてきたとされる（遼寧省檔案館 一九八四）。彼らは毛皮収買のために三姓副都統衙門から派遣されてきた佐領、驍騎校などの役人たちに毛皮を支払い、その恩賞として絹織物や綿織物、食糧などを受け取つていた。

清朝の東北の毛皮貢納民に対する支配は、きわめて組織的、体系的であつた。清朝は毛皮貢納民を「ポー」（戸）、「ガシヤン」（集落）、「ハラ」（氏族）の三つの単位に整理し、ハラとガシヤンにそれぞれ長を任じて毛皮のとりまとめと恩賞の頒布、そして集落や周辺地域の治安維持などを命じた。そして定期的官吏や兵を派遣して毛皮の収集と恩賞の配布をすることとにも、殺人、窃盗などの治安を乱すような行為がおきたときには、速やかに係官を派遣して犯人の逮捕と裁判を行い、時には被害者に補償までしていた（詳しくは拙著『北方から来た交易民』（佐々木 一九九六・二二―一四八）を参照）。

ウデへの祖先たちにとつても、清朝との関係は単なる文化交流ではなく、社会的経済的に相互に深く依存する関係であつた。クロテンの貢納に対する恩賞はハラやガシヤンの長には緞子の衣類や反物で、非役職者には木綿の衣服か反物であつたが、それらは量が多かつたために彼らの衣文化を支えることになつた。ウデへの衣装には魚皮や獣皮も使われるが、主要な素材は綿織物である。また、役職者に与えられる緞子は、交易品になるとともに、威信財でもあり、持ち主が死ぬと墓地に副葬された（佐々木 一九九〇・七二―七五）。さらに毛皮貢納に向ければ旅費として粉、粟、酒が支給され、また満洲や漢族の商人との取引でも穀類や酒類が手に入ったため、彼らの食文化はヨーロッパ人が入る前から、穀物食を伴う豊かな

ものであった。現在でも彼らの中には華北あたりでよく作られるような饅頭（マントウ）や餃子の類がしばしば見られる。ウデへが清朝を中心とする東アジアの経済システムに組み込まれる時に、その媒体となったのが、クロテン、銀ギツネ、カワウソをはじめとする高価な毛皮類と朝鮮人參、麝香、シカの袋角、熊胆などの薬用の狩猟採集産品であった。それはウデへだけに限らず、清朝の統治下におかれたアムール川流域と樺太の人々に共通しているが、このようなものを媒体にした広域経済システムへの参入は、その後ウデへをはじめとするこの地域の先住民たちの基本的な経済戦略となる。彼らの居住地は一八六〇年の北京条約でロシア領となり、初期資本主義経済に巻き込まれ、一九一七年の革命でさらに社会主義計画経済に組み込まれる。その社会経済的な環境が変化するために、他の戦略を使うことも余儀なくされるが、高級毛皮と高価な薬剤原料を媒体とした交易活動が彼らにとつて基本的な経済戦略であることには変わりはなかった。そして、その基本戦略が彼らの狩猟活動の骨格を形成した。

生業の中で狩猟がしめる比重は、同じく清朝の統治下にいたアムール、沿海地方、樺太の住民の中でも、ウデへにおいて最も高かった。彼らの隣人であるナーナイ、ウリチ、オロチらも狩猟に従事し、清朝にクロテンを収め、また帝政ロシアやソ連時代にもクロテンの毛皮を媒体として、その経済システムに参入したが、彼らの場合にはアムールや烏蘇里江、松花江といった大河川でのサケ・マス漁に割く時間が多く、漁が主で狩は従であった。少し離れるがアムール河口周辺のニヴフ（ギリヤーク）にいたつては森での狩猟が苦手であったとさえいわれた [Hilgert 1989: 286]。ニヴフは苦手な狩猟を得意の交易活動で補った。つまり、彼らは漢族商人や満洲官吏から手に入れた中国産品や樺太で手に入れた日本産品を、狩猟は得意だが交易が苦手な樺太東海岸の同族やウイルタ、あるいはアムール支流奥地のエヴェンキたちに売り、彼らから毛皮などの狩猟産品を仕入れて中国側に売っていたのである。アムール・ニヴフはアムール地域と樺太における、中国・日本産品の普及者だった。ただし、彼らはウデへの居住地までは進出していない。そこは中国に近いため、漢族商人が直接彼らのもとに商品を手にやってきていた。今世紀前半には日本人の漁民が日本海沿岸でウデへらと商売し、食料や衣料品を売り、魚を仕入れて帰っていったという。

ウデへの狩猟は、時代を通じて、対象となる獲物の種類によって大きく二つの活動に分類できる。一つは主に肉や毛皮、

骨角を得るための大型獣狩猟であり、もう一つは主に毛皮や薬効成分のある内臓を得るための小型・中型獣狩猟（あるいは毛皮獣狩猟）である。前者の場合対象はオオシカ、ヘラジカ、野生の山羊、イノシシ、クマ（ウデへの居住地にはツキノワグマとヒグマの両方がいる）などであり、後者の対象はクロテン、テン、キツネ、イタチ、アナグマ、タヌキ、カワウソ、ウサギ、ミンク、マスクラット、そしてジャコウジカである。目的は大型獣はもっぱら自家消費用の肉、毛皮、骨角にあり、これらが売りに出されることは少ない。例外は熊胆とオオシカの袋角で、両方とも高価な薬として、入念な処理を施した上で、中国や朝鮮から来た商人に売られた。それに対して、小型・中型獣狩猟の方は毛皮や薬効成分となる内臓を売るのが目的であり、いわば換金作物を得るための狩猟である。右に挙げた動物はいずれも毛皮を利用するために捕られるもので、ジャコウジカはこれまた非常に高価な麝香を得るために捕られる。ただし、食糧事情がよくないときにはこれらの動物の肉も食用に供される。

狩猟方法も大型獣狩猟と小型獣狩猟とは異なる。概して、前者の場合は早く仕止めることが要求されるために、槍、弓矢、銃などが使われるのに対して、前者に対しては貴重な商品である毛皮を痛めないようにしなければならないために、罠類が多用され、銃で撃つ場合にも専用の小型のものが使われる。特に彼らが使っていた罠の種類を調べると、彼らの狩猟活動が何を主目的としていたのかがよく見えてくる。

一九九五年と九六年に二度にわたる調査の結果明らかになってきたのは、鉄製の捕獣器（いわゆるトラバサミ）が普及する以前には、ウデへの間ではクロテンやカワウソなどの毛皮獣に対する罠の種類が多く、またそれを使つた捕獲方法も非常に多様であったのに対して、クマやシカなどの大型獣を対象とした罠はあまり発達していなかったということであった。それは、同じように江戸時代には貨幣経済の中で活動していた日本の東北地方のマガギたちの罠の種類と比較すると歴然としている。つまり、マガギたちの間ではウサギやテンなどの小型動物を捕らえる罠（例えば秋田の阿仁マガギの「ウッチョウ」とともに、越後三面の「アオオソ」、「クマオソ」、阿仁の「アオピラ」、「クマピラ」のようにクマやカモシカなどの大型獣を捕らえる罠もよく発達し、しばしばかけられていた〔安斎・佐藤 一九九六・二〇—二二・田口 一九九四・四七、六八、一〇一、一三八、二一八—二二五〕。他方、ウデへではクマやオオシカなどの大型獣に対する罠には大型の自動弓しかなかつ

たのに対して、小型・中型の毛皮獣に対する罾は状況に応じて何種類ものものが使い分けられ、また同じ罾でも設置場所や使用時期に応じて少しずつ仕掛けを変えるなどのきめ細かな配慮がなされていた。

例えば、小川の上にわたっている丸太の上にかける、紐の輪を使った罾（ウデへ語ではフカエバと呼ばれる）の場合は、秋のまだ河が凍らない程度の寒さの時期ならば、小石の重りを仕掛けて、川に引きずり落とし、溺死させる方法を採用。しかし、川が凍結しその方法が使えなくなると、今度は弾力性の高い枝をしならせて輪に繋ぎ、獲物がかかると跳ね上げて空中につり上げるように仕掛ける。

小川の上に橋のように倒れている丸太に罾を設置するのは、クロテンが好奇心が強く、そのような場所を好んで渡りたがるという性質を利用したものである。そのような罾にはさらにドゥイ(Dui)と呼ばれる丸太で圧殺（あるいは撲殺）する罾もある。このような歩き回っているクロテンを狙うものは、猟期の遙か以前に、仕掛けが作動しないよう設置しておく。罾の製作にはその場でとれる丸太や木の枝、蒿などを利用するため、長い間に自然にとけ込み、動物もその存在を気にしなくなるといわれる。そして木の葉が落ち始める秋に罾が作動するようにセットし直す。毛皮獣の猟期は普通上等の毛が生えそろう秋から冬である。

クロテンがすみかになっている木の空洞などにいることがわかっているとき、あるいは空洞に逃げ込んだときには、捕貂網が使われる。その場合には、2つの穴を除いて逃げ出しそうな穴をすべて塞ぎ、一方に網を仕掛け、他方からモミの葉を燃やして煙し出す。もし、木の幹の空洞が高くて、煙しが効かない場合は、ハダナ(Hadana)と呼ばれる罾をセットする。出口に箱状の通路を作り、通路の上に明けた穴から丸太を縦に落として、クロテンのうなじを突くものである。動物を罾に追い込むには木の幹をたたいて嚇かす。

このように、クロテンその他の小型・中型の毛皮獣用の罾は、捕獲しようとする場面に応じて、細かく使い分けられていた。また、罾の仕掛けの強さや大きさ、罾に導く通路の幅を調節することで、かかる獲物を限定することもできた。

これだけクロテン用の罾が多様だということは、それだけウデへの狩猟活動全体の中で、クロテン猟の比重が高かったことを意味している。それはマタギたちの場合との大きな相違であるが、その違いを生み出したのは、それぞれが属して

いた中国と日本の狩猟産品に対する需要の相違であった。すなわち、中国（清朝）では狩猟産品の中でも毛皮に対する需要が圧倒的に高かったのに対して、日本では熊胆のように獲物の内臓や体を薬として売った方が金になった。⁷⁾

ここで紹介したウデへのクロテン用の罠のうち、ドウイとフカは古くから使われていたことが知られている。前者は地元では中国式ともいわれ、後者については全く同じ構造のものを間宮林蔵が樺太アイヌの罠として『北夷分界余話』で詳しい記録を残している「間宮 一九八八」。また、捕貂網も同じ方法が楊賓の『柳邊紀略』巻三で紹介されているところを見ると、既に今から三〇〇年前の一七世紀末期には知られていた方法で、松花江方面で使われていた。ドウイやフカ、捕貂網のような罠や道具は、細部には仕掛ける人の個人的な創意工夫も見られただろうが、その基本形は清朝支配時代から世代毎に受け継がれてきたものと思われる。ウデへの祖先を含む東北アジアの狩猟民たちは、清朝を中心とした中国の社会経済システムに巻き込まれることで、既に二〇〇年から三〇〇年前には、敏捷な小動物を毛皮をできる限り痛めないで捕らえるための装置を、かなり高度に発達させていたということが出来る。そして、毛皮獣狩猟の経済的な重要性は、ロシアがこの地域を支配するようになってからも変わらなかった。

四 ソ連時代のウデへの狩猟

一八六〇年の北京条約によって現在の沿海地方が最終的にロシア帝国の領土とされて以来、ウデへは中華帝国の社会経済システムから脱してヨーロッパ的な社会経済システムの方に参入することになった。その間に初期資本主義的なシステムが彼らの間に持ち込まれたと思われるが、それは十分機能しない間にロシア革命を迎えてしまったため、まもなく彼らは社会主義的な計画経済の中に組み込まれる。

期間的には短かったが（一八六〇年から一九一七年までの五七年間続くが）、末期帝政ロシアの初期資本主義的なシステムはウデへの経済と社会に大きな混乱をもたらした。中国側の資料によれば、彼らの一部はロシア人の入植と林業や鉱山労働への徴用のためにパニック状態に陥ったようで、国境を越えて中国側に逃げ出すものもいたようである「遼寧省檔案館一九八四・四三〇—四三三」。また、朝貢関係が崩れることで、もはや中国から物質的な恩恵を受けることができなくなり、

初期資本主義的な自由競争の波に洗われることになった。つまり、ロシア人や漢民族の商人たちが毛皮交易を主導するようになり、商業狩猟に従事するウデへたちの利益は急速に減少した。そして、朝貢による恩恵がなくなるのと相まって、彼らの生活水準は低下したと考えられる。生活の困窮とヨーロッパ人や漢族が持ち込む天然痘や結核などの疫病やアルコールなどが相乗効果となって、ウデへをはじめとする沿海地方やアムール、樺太の先住民の人口は一九世紀末期から二〇世紀初頭にかけて減り続ける。また、当時急速に増大した移民（ロシア系、中国系、朝鮮系の移民が烏蘇里江流域に入っている）との混血、文化融合も進み、清朝支配時代の生活を放棄したものがかなりいた。ロシア人たちに「ターズ」と呼ばれた人々は、恐らくウデへに近い人々が漢族系の移民たちと文化的にも形質的にも融合したもので、中国語を母語とし、中国風の農耕文化を体得した人々である。

この時代にはもう一つ、ウデへの狩猟にとって後に重大な意味を持つ現象が見られた。それはロシア人がもたらした銃砲や銃の普及である。射程距離、命中精度、威力のいずれをとっても弓矢は銃の敵ではない。その普及はウデへの狩猟文化に計り知れない影響を残した。しかし、獲物の捕獲効率が上がるといったプラスの影響だけでなく、マイナスの影響ももたらした。例えば、銃や弾薬を手に入れるためには狩人自ら貨幣経済に積極的に参入しなければならず、逆に生産手段である銃や弾薬を手に入れることが狩猟という生産活動の死命を制することになってしまうのである。

革命によって誕生したソ連政権は、初期には帝政時代の先住民たちの状態を社会矛盾の一つとみなして、かなり理想主義的な政策を掲げ、医療や教育の充実とともに、毛皮類の買い取り価格の適正化を行って、先住民たちの保護と人口増加をはかった。ただし、その裏には毛皮を輸出用の戦略物資とみなして、その生産販売を国家が全面的に統制しようという意図もあった。毛皮の流通を国家が統制しようとした点ではソ連の対シベリア、極東先住民民族政策には、清朝のような前近代的な中華帝国の東北先住民政策と共通する面も見られる。そしてそれは冷戦時代を迎えるとかかなり顕著となる。

一九二〇年代にみなぎっていた理想主義的な社会主義は三〇年代に入り、スターリンの権力が確立されると、きわめて現実主義的になる。それまで世界的に共通のローマ字を主体にして創られたシベリア先住民たちの言語表記もそのころキリル文字を主体としたものに変更されている。そして、狩猟採集やトナカイ飼育に依拠した生活様式を「原始」、「未開」

と規定して、それを社会主義段階に飛躍させるために、居住地の定住化、特定の拠点集落への集住、生産手段の共有化、集団化、そして旧来の社会組織の社会主義的な社会組織への改変が行われた。かつてハラ単位で占有されていた猟場や居住地は、新たに結成されたコルホース単位の所有となり、分割し直されてコルホース成員に割り当てられた。例えば、我々が調査したピキン川流域のウデへでは、一九三〇年代からウルガ、ラオへ、タハロ、オロンなどの各地に集落が新たに形成され、コルホースが設置された。

さらにブレジネフ時代には、コルホースの統合とソフホース化が推進された。ピキン川のウデへの間でもそのような政策によって住民の集住が進み、最終的にはオロン村の対岸にクラスヌイ・ヤール⁽⁸⁾という村が結成され、住民はそこに集められるとともに、コルホースも一つの国営狩猟林業組合(ゴスプロムホース Голпрохоз)に統合された。このゴスプロムホースはこの村が含まれている行政地区の名称をとって「ポジャールスキー」(Пожаарский)と命名され、毛皮獣狩猟、薬草採集、林業、養蜂などを主要な生産部門として一九九四年の暮れまで続いた。

ソ連時代には基本的には国家の計画をいかに達成するかが人々の主要な課題であり、計画を達成しさえすれば、国家が製品を買い取ってくれた。ソ連が崩壊する直前の一九九一年のゴスプロムホース「ポジャールスキー」の決算報告書を見ると、それ以降に比べて、各部門の売り上げの総売り上げに占める比率に均衡がとれている。毛皮、木材、薬剤原料、養蜂などいずれの部門も、計画に従っていれば一定の売り上げが見込めたために、生産意欲も見られたのだろう。ソ連時代は狩猟産品が戦略物資にされ、厳しい統制は受けたが、確実に現金収入となった。毛皮は冷戦時代のソ連にとっては数少ない西側陣営の国々への輸出品の一つだったのである。確かに、定住化政策や生産手段である猟場や狩猟用具の集団所有や国有化といった、彼らの社会組織を大きく変革するような政策も見られたが、基本的にはウデへたちは先に述べたような高級毛皮と高価な薬剤原料を媒体とする取引を通じて広域経済システムに参入するという経済戦略を変えることなく、ソ連経済に参画することができた。

しかし、ソ連政府は冷戦時代の戦略物資として毛皮を位置づけ、ウデへたちの狩猟を保護する一方で、それとは全く矛盾する政策も執った。例えば、文化政策では、ウデへのような人々は遅れた社会経済段階にあるものと規定し、それを早

晩他の「文明」諸民族のレベルまで引き上げ、「ソ連文化」の担い手にしなくてはならないという基本方針をもっていた。教育レベルを上げるためにということでソ連の共通語であるロシア語教育を促進し、固有言語の授業数を削減する政策をとり、さらに一部の舞踊、歌謡、手工芸を除いては伝統的な文化を教育する機会を与えようとしなかった。そのために言語だけでなく、狩猟方法まで優れた古来の方法が衰退した。例えば、獲物を痛めることのない古来の罠はほとんど若い人たちには受け継がれず、全国共通の鉄製の捕獣器が普及した。銃と弾薬はゴスプロムホースが確保してくれるために不自由することはなかったが、捕獲効率の高い銃が使いやすいということとは、逆に資源保持が難しくなることにつながる。

古い狩猟方法が廃れただけでなく、狩猟従事者の数も減少した。それはソ連社会にいれば必然的に起こる現象で、子どもの頃からモスクワを中心とする都市部での生活を理想とするような教育を受ければ、それと対極にあるような森での狩猟採集に従事しようとするものは当然減る。調査に協力してくれた三〇代の若い狩人の言によれば、彼と学校時代同級だった五人の内、狩人になったのは彼一人だけであとは都市部に出ていったという。ソ連時代には既に教育の普及によって、クラスヌイ・ヤールのような極東の村でも都市部での便利な生活を知らないものではなく、厳しい狩人の生活を続ける方が困難である。狩猟製品の売り上げがゴスプロムホースの総売り上げの三〇%から四〇%に達するこの村でさえ、今やプロの狩人は村の総人口のわずか五、六%に過ぎない。

さらに、ソ連は土地を国有とした上に、その利用計画の決定権まで中央政府が握るようにしたために、地元住民の意思と無関係な国土利用や開発が頻繁に行われることになった。ウデへの居住地域でも、その森林資源が国の注目を集めた結果、狩猟動物の宝庫である森が伐採の対象とされた。しかも、その開発方法が実に粗暴で、乱伐が目立った。例えば、クラスヌイ・ヤール村のゴスプロムホースはビキン川の支流のタハロ川流域の森林を伐採対象として、長年に渡って木材の切り出しを行ってきたが、その結果、そのあたりの猟場は完全に破壊された。ソ連、ロシアの森林伐採はまず対象となる森の木をすべて切り倒し、そこからよい木材だけを選別して出荷するという方式を取っていたために、伐採対象とされたところは実に無惨な光景が広がることになる。つまり、切り倒された大量の木があたりに散乱して足の踏み場もないような状態になるのである。しかも、それらの放置された木は国有財産であるとして、地元の人たちは薪にもできない

い。さらに、沿海地方では森を人工的に回復させる努力がなされていないため、伐採後に植林さえ行われない。放置された箇所は結局は山火事の後のように、白樺を中心とした二次林が形成され、最後は以前の混合林に戻るのであるが、それには数十年から百年以上はかかるし、その間、狩猟対象となるような動物は戻らないので、長い間猟場としては使えない。

猟場は彼らにとつてはかけがいのない生産手段であり、森林開発はそれを完全に破壊してしまう。そうなるともはや高級な狩猟採集製品を取引の媒体とするような従来の広域経済システムへの参入戦略は使えない。

そのために既にソ連時代、特に森林開発が加速した一九七〇年代以後には、森での生活をあきらめて都市に出てくるウデへも相次いだ。ピキン川やホル川流域のウデへはまだ地理的に奥地にいたために、開発の手が伸びるのが遅れたが、イマン川の流域では森林開発が猟場に決定的なダメージを与えたために、多くのウデへが森での狩猟を主体とした生活をあきらめて離村し、村落が崩壊していったといわれる。ピキンのウデへでも、ソ連崩壊直後の一九九二年に沿海地方の政府が韓国の「現代グループ」とピキン川上流方面の森林伐採に関する協定書を結び、その材木を日本へ売る計画が持ち上がった。それは地元住民の反対運動の盛り上がりによって裁判に持ち込まれ、結局彼らの猟場は伐採対象からとりあえずはずされたが、木材の輸出で外貨を稼ぎ、経済状態を立て直そうというのは、沿海地方の政府の重要な政策の一つであるだけに、ピキンのウデへの猟場も必ずしも安泰と言うわけではない。

ソ連時代は企業体が残した数字の上では、ウデへにとつて恵まれた時代のように見えるが、その裏では今日のような困窮の伏線が既に張られていたともいえるだろう。

五 ソ連崩壊後のウデへの狩猟

一九九一年の暮れにゴルバチョフ大統領が辞任してソ連は崩壊し、かつての一五の共和国は完全に独立して、新しいロシア連邦共和国も誕生した。新生ロシアは社会主義を放棄し、西側と同様の資本主義国家として再出発をはかった。そして、いち早く西側の経済に迫りつくために、経済の開放と市場経済化を性急に押し進めた。しかし、「ショック療法」と呼

ばれた一連の急進改革的な政策はロシアの経済を大きな混乱に陥れ、その余波は未だに消えていない。

その混乱はモスクワから遠く離れた、極東沿海地方のシホテ・アリン山脈の中にも即座に及んだ。筆者が一九九五年の調査の時にコピーさせてもらったゴスプロムホース「ポジャールスキー」の一九九一年から九四年までの売り上げ報告の数値をみると、生産量はその間横這いなし減少傾向にあるのに対して、売り上げ高の数値は毎年急激に増大しており、この間に急激なインフレにおそわれたことが見て取れる。しかし、その売上高を年末のレートでもってドルに換算して比較すると、逆に九一年から九二年にかけて二〇分の一に落ち込んでおり、世界のロシア経済に対する評価が、実際の生産力の低下以上に低落したことがよくわかる。ゴスプロムホースの売り上げのドル換算の数値は九三年、九四年と回復傾向にはあるが、九一年の水準にははるかに及ばず、いまだに一〇分の一以下である。

ソ連崩壊後、ウデへの狩猟活動は、二つの要因が重なって厳しい状況に立たされている。

一つは世界的な毛皮に対する需要の落ち込みである。その第一の原因は、毛皮に代わる新しい人工的な防寒素材の発達である。昔から毛皮とともに綿入れが防寒服の代表であったが、毛皮と同様に重く、湿気を吸いやすいのが欠点であった。しかし、今日では断熱効果が高く、耐久性に優れた化学繊維でダウンなどの軽い防寒素材を包む技術が発達し、軽くて毛皮並の防寒性を持つ衣類が急速に普及し、綿入れや毛皮にとってかわろうとしている。これらの化学繊維で作られた防寒服が、シベリアやロシア極東の森やツンドラで、狩猟という激しい活動に長時間耐えられるかどうかはまだ未知数であり、長い歴史を持つ毛皮の代役を完全に務められるかどうかは疑問ではある。しかし、都市生活者にとっては軽くてメンテナンスが簡単な新しい素材の防寒服の方が便利である。シベリアにも都市は多数あり、その冬はマイナス三〇度から五〇度にも達することから、当然軽くて暖かい防寒着の需要は大きい。シベリアの毛皮は地元で新しいライバルと競争しなければならぬのである。

需要落ち込みの第二の理由は自然保護運動、とりわけ動物愛護運動の高まりである。狩猟対象とされてきた動物には絶滅寸前のものであるため、これらに対しては厳しい捕獲制限などの措置がとられている。シベリアの動物で禁猟で有名なものにはウスリー・トラなどがある。しかし、それだけでなく、野生動物を殺すことを悪とみなす風潮が高

まつていることも事実である。そのような風潮の中で毛皮を着用しない運動なども現れ、需要を一層冷やすことに一役買っている。また、毛皮には防寒だけでなく、ファッション界でもそれまで高い人気を集めていたが、最近ではフェイク・ファーと呼ばれる毛皮によく似せた人工素材の方が喜ばれるなど、美の点でもその地位は揺らいでいる。

ウデへの狩猟活動が厳しい状況にあるもう一つの要因は、ロシアが自由競争と市場原理に基づく経済運営を始めたことである。

ソ連政府が、計画に基づいて生産される毛皮その他の狩猟産品を買い取るときの価格は、需給バランスによるのではなく、政府が恣意的に決定していた。そのため、ゴスプロムホースで働くウデへの狩人には生産量や価格の決定権はなかったが、比較的高い報酬が払われていたことから、その生活は安定していた。ソ連はシベリア、極東の先住民の狩猟活動を統制してはいたが、事実上保護していたのである。しかし、新しいロシアはそのような事実上の保護をやめた。生産手段の私有化が許可され、ゴスプロムホースやソフホースのような国営企業や、ゴルホースのような集団農場には民営化の努力が求められた。しかし、市場経済を一度も経験したことのない大多数の旧ソ連の人々は私有化と私物化の区別が付かず、とても自由競争原理を導入した企業運営などできる状況にはなかつた。

我々が調査した沿海地方のピキン川沿いの村、クラスヌイ・ヤールでは、銃や罠など装備は私有化されたが、猟場の私有化は行われず、狩人がそれぞれ独立した経営者となることはなかつた。その代わりに、この村のゴスプロムホースは九四年の暮れに組織替えを行い、株式会社「ピキン」(Акционерное Общество "Бикин")と名乗るようになった。ピキンとは彼らにとって母なる川であるピキン川にちなんだ名前である。これは国や地方政府に頼らず、自分たちでソ連崩壊後の経済的な困難を乗り切ろうとする努力の現れではある。この村の企業体は株をもつてもらうことで沿海地方の政府に半分出資してもらい、残りはこの企業自身が負担して、一応経営権の半分を自分たちのものとしたのである。

しかし、ロシア政府の意向に添ってそのように国営企業から脱皮したものの、株式会社ピキンの前途は決して明るくない。先に述べたようなことが原因で、この企業のもっとも重要な部門である毛皮生産部門の売り上げが思うようにのびないからである。一応毛皮部門の売り上げは九二年以来回復してはいる。しかし、毛皮の単価は落ち込んだまま回復する気

配にない。例えばもつとも高価な毛皮であるはずのクロテンが、九一年には一枚一二〇ドル以上もしたものが、九二年に九ドルとなり、九四年には六ドル弱とさらに落ちている。ただし、このドル建ての数字は、あまり実態を反映していないかもしれない。というのは、この間のルーブルの対ドルレートがロシアの物価や賃金の推移以上に下がっているからである。しかし、いずれにしても、毛皮の価格決定権は相変わらずウデへの手にはわたっていない。需要低迷のため買い手市場になっているのである。

さらに、世界的な毛皮需要の低迷は、外国の毛皮のロシアへの流入を招いた。イタリアや中国などの毛皮生産者にとって、ロシアは最後に最大の市場である。彼らの参入によって、ウデへを含むシベリア、極東の先住民たちは毛皮の販売で強力なライバルを迎えてしまった。これは彼らの毛皮生産にとっては第三の危機要因となっている。

六 結論

スチュアート・ヘンリーによれば、欧米の人類学では狩猟採集民研究に関して、「伝統主義」と「歴史修正主義」の立場に大きく分けることができるという。伝統主義とは従来の民族考古学的研究に見られるように、狩猟採集民の社会、経済、文化に旧石器時代の狩猟採集民の姿を見て、それを時代を通して共通するものとして、時間的に一般化しようとする立場である。それに対して、「歴史修正主義」の立場をとる人々は民族誌に描かれる姿は時代の産物であるとみる。すなわち、現在残されている狩猟採集民は膨張する文明によって周辺に追いやられた人々であり、彼らの社会、経済形態、文化は文明と接触することを前提として成立したものであって、意外と新しく出現したものであるとする「スチュアート a. 七一九」。

このような対立図式に則せば、ソ連時代のウデへの民族誌が伝統主義的な立場に立っているのに対して、本稿の立場は歴史修正主義的な立場に立っていることができる。

「三、中華世界の中のウデへの狩猟」で明らかにしたように、ウデへの経済、社会、文化は既に一七世紀には中国を中心とする巨大な東アジア経済圏の中に参画することで成り立つものであった。毛皮獣を効率的にしかも毛皮を痛めないで

とることを徹底的に追求した異類や、餃子や饅頭などの穀類を使った食べ物、あるいは木綿や美しい絹の衣装やその糸を使った見事な刺繍、清朝から授けられた地位が大きくものをいう社会など、それは明らかに清朝の東北アジアの人々に對する經濟政策、社會政策がなければ見られない現象である。確かに、彼らの狩猟方法や儀禮、あるいは社會制度の中にはそれ以前からの、あるいは旧石器時代から連綿と生き続けてきたような要素もみられるのは事實である。しかし、今までのウデへに關する民族誌はそのような面を強調しすぎたことは否めず、それだけでは彼らの實態はすべて反映できていないだろう。ソ連時代の民族誌が伝統主義的な立場に立ち続けたのは、ソ連民族学がおかれた政治的な立場によるところが大きい。

そのような前提に立つて、ウデへの經濟、社會における狩猟活動の位置づけの変遷をまとめてみよう。

まず彼らを取りまく広域的な經濟システムは、東アジア的王朝支配によるもの(清朝支配時代)、初期資本主義的なもの(ロシア帝国の沿海地方領有)、社會主義的計畫經濟(一九一七年から一九九一年までのソ連時代)、そして再び初期資本主義的な市場經濟(ソ連崩壊後)と変遷した。その間にウデへの狩猟活動の形態は、クロテンをはじめとする交易用の毛皮獸をとる狩猟を柱にしなが、それを肉や日常生活用の毛皮を得るための大型獸狩猟が脇からかためる(大型獸狩猟も最も社會的威信の高い食料獲得手段として、重要性は高いが、實生活には交易品となり、現金を得ることができる毛皮獸狩猟の方が經濟的意義は大きい)という基本的な状態を保ちながらも、彼らの經濟状態は次のように變化した。

すなわち、清朝支配時代にはとにかく中国側がクロテンを高く買い取ってくれる上に、沿海地方ではクロテン猟でも交易でもライバルが少なかったことから、毛皮獸狩猟と大型獸狩猟を並立させながら、かなり余裕を持った生活ができたと考えられる。しかし、それが中国の撤退、ロシアの進出によって一変する。毛皮交易には中国商人やロシア商人というライバルが加わり、買い取り価格が下がる上に、ロシア人ハンターがクロテン猟に参加し始め、さらには開発によって猟場、漁場が縮小され始めた。人々は必死になって罾を仕掛けるが、毛皮獸猟による収入は下がり、それを補うために大型獸狩猟の重要性が高まる。しかし、生活水準の低下は止まらず、増加する移民によってもたらされる疫病(天然痘や結核など)が人口減少を加速する。そのような状況はロシア革命によって成立した社會主義政權によってくい止められ、伝染病の予

防や生活水準の向上、狩猟の生産性の向上が図られ、毛皮獣狩猟は大型獣狩猟による補佐を受けながら再び狩人とその家族の生活を保障するようになる。しかし、ソ連は沿海地方の河川流域や森林の「開発」も促進したために、ウデへの狩猟をとりまく自然環境が悪化し始め、狩猟活動の継続を断念して森を出る人々が後を絶たなくなり、ピキン川流域のように比較的奥まった場所に位置していた恵まれた人々をのぞいては、ウデへ社会の崩壊がみられた。そのような状況の中でソ連崩壊によって資本主義市場経済が導入され、再びウデへの狩猟活動は国家の保護を失った。かろうじて狩猟採集活動に依拠した経済活動を続けてきた人々も存続の危機に立たされるようになっていく。

このように整理した上で、序文で提起していた問題、すなわち、広域経済システムに参入した狩猟採集活動の可能性と限界について、論じてみよう。

可能性と限界は表裏一体のものであるため、分けて論じることは無意味である。可能性の及ぶところがまた限界でもある。広域経済システムに参入した狩猟採集活動は、それに従事する人々の日常生活の必需品を直接満たすものではなく、一度交換、取引、交易というかたちで他者の需要を満たした上で、より価値の高いもの、あるいは直接狩猟採集で獲得するよりも大量の物資を得るための活動である。したがって、もはやそれは「生業」ではない。清朝時代のウデへたちの毛皮獣狩猟をどのような術語で呼ぶべきか、わからないが、ソ連時代以後のそれは、国家経済の一翼を担っていたことから、「産業」と呼べる状態にあつたといえるだろう。

狩猟採集という活動は、あくまでも人間が自然から収奪した分の回復を自然の力に完全に委ねているため、広域経済システムの一翼を担って、生業から産業へと脱皮しても、量的な限界が農耕や牧畜、あるいは鉱工業といった他の産業分野よりもはるかに小さく、産業としての成長もそれほど高く、長くは望めないことは事実である。しかし、一定の条件さえ整えば、それに従事する人々に多大な恩恵をもたらすことは清朝支配時代とソ連時代のウデへの状況を見れば明らかである。

清朝時代の対東北狩猟採集民政策とソ連時代の対極東先住民政策とは基本的な部分で共通性がみられる。その第一は、政府の中枢部が恣意的にこれらの人々が生産する毛皮、薬剤原料などに高い価値を付加し、毎年一定量を確実に買い取っ

ていた点である。それによつて毛皮獣狩猟に従事する狩猟民たちは毎年高額の定収入を得ることができ、その収入によつて、生業的な狩猟採集、つまり肉や日常的に使用するための皮革類をとるための大型獣狩猟や根菜やベリー類を採取するような採集活動ではとうてい得られないような、高カロリーの穀物食や、衣服の仕立てが容易でかつ美的にもすぐれた織維製品などを購入して、生活をより快適にし、その文化をより洗練されたものにする事ができる。清朝時代のウデへをはじめとする沿海州やアムール川流域の先住民たちはまさにそれを行つていたのであり、彼らの間に少なからず残されている童文の入つた緞子の晴れ着、抽象性が高い洗練された文様などは、その経済力を使つて中国から積極的に導入した文化が大きく影響したものである。

ソ連時代でも、住民のあこがれる文化が中国のものからロシアのものに変化しただけで、状況は同様であつた。マクロなレベルで見れば、ソ連時代に少なからぬインテリ層がウデへらの間に成長し、その工芸作品を芸術のレベルに高め、彼らの精神世界を文学という手段で表現するようになったのも、単にソ連の「少数民族保護政策」のお陰ではなく、ソ連経済の下で彼らが商業的狩猟採集活動によつて経済力を培つてきたからでもある。

第二の共通でかつ重要な政策は、清朝もソ連も狩猟民たちの毛皮の生産に必ずしも右肩上がりの成長を期待しなかつた点にある。これは結果論であつて意図的な政策であつたかどうかは疑問ではあるが、それが自然の回復力に完全に頼らねばならない狩猟採集活動にとつては幸いした。つまり、毎年捕獲される量が一定であれば、自然界はそれに併せてバランスをとるからである。ただし、自然界のバランスについては清朝とソ連ではその対応は異なつてゐる。清朝の場合はいくまでも中央政府の意向によつてアムール、沿海州方面の狩猟民たちから貢納品として徴収するクロテンの量を固定し、しかも民間では取引できない禁制品にただけで、この地域の生態系のバランスなどはほとんど考慮に入れてゐない。それに対して、ソ連の場合には資源の永続的利用という観点から綿密な調査がなされ、バランスをとるように捕獲量を調整してゐる。したがつて、清朝とロシアでは毛皮獣の資源保持のための政策は全く異なつてゐるが、国家の経済が必ずしも右肩上がりの成長を必要としないという点で共通しており、それが資源の永続的活用とそれに頼る狩猟民たちの活動を保証してゐたことは事実である。

第三に、両者とも人の移動を国家が統制し、狩猟採集民たちの土地への他地域からの移住を調整し、結果的に狩猟採集民たちの猟場を確保していた点である。清朝の場合は有名な「封禁令」と呼ばれる命令が乾隆時代（二世紀後半）に出され、東北地方への漢族農民の入植が厳しく制限されたが、アムール、沿海州の地域へはさらに朝貢を受け付けるために派遣される役人を除いては外来者の侵入は厳重に禁じられた。漢族や満洲の商人たちはアムールの狩猟民たちが朝貢のために出てくる三姓という町でしか、狩猟民たちと直接の毛皮取引はできなかったのである。しかし、そのような政策は、狩猟民たちの猟場を確保することに役立つていた。

ソ連では先述のように、しばしばロシア系の移民が入植して森を切り開いて農地を開墾したり、林業を延ばすために木材資源を浪費したり、あるいはロシア系のハンターが入り込んで先住民の猟場を荒らしたりなど、必ずしも先住民の狩人の猟場を守ってはいない。そのために少なからぬウデへが山を下りて狩猟から離れたことも既に述べた。しかし、これらの開発や外来者の入植といえども、ソ連時代には国家が統制していたのであり、企業や個人が国家の意志に反して行っていたのではない。狩猟採集生活から離れたウデへも、あくまでもソ連政府の意向にしたがったのであり、ソ連時代にはそれなりの補償、例えば都市部で暮らす権利の付与（ソ連時代には農村戸籍のものはやたらに都市部では暮らせなかった、つまり居住の自由は認められていなかった、都市での就職先の斡旋、年金面での優遇などを受けていたはずである。そして、森林開発や農業開発の対象とならなかった地域、例えばビキン川流域などへは、村やゴスプロムホースに派遣される役人や役員を除いては、外部から移住することはできなかったために（村人も許可なく都市部に出ることはできなかった）、猟場は完全にゴスプロムホース所属のハンターたちに委ねられ、彼らは狩猟によって生活を保障された。

このように、狩猟採集活動でもって参入しても、人々に安定した暮らしを保証していた広域経済システムというものは、当然のことながら、資本主義をその基盤とした現代最も世界的に広まっているシステムとは基本的な部分で全く正反対の性格を有している。つまり、資本主義では需給関係が価格を決定する最大の要因であるのに対して、清朝やソ連の経済システムでは必ずしもそうではなく、中央政府の意向が恣意的な価値体系を生み出すことが多く、資本主義では自由競争によって経済活動の活性化を図るのが原則であるのに対して、清朝やソ連では自由競争が避けられ、国家が利益の集積と再

分配を独占して行うために、多くの産業部門で独占化、專業化が求められていた。そして、資本主義の経済システムが常に右肩上がりの拡大再生産を続けることで維持されるのに対して、清朝と社会主義では必ずしもその必要はなかった。

本稿で例にとりあげたウデの場合、狩猟採集による広域経済システムへの参入が、資本主義的なシステムの場合にまだ成功していないのは、システムと彼らの狩猟採集活動とがこれまで不適応を起こしているためである。そして、その原因は明らかに彼らの狩猟採集が非資本主義的なシステムにあまりにも適応しすぎていることにある。というのは、カナダの一部のイヌイットの事例のように、今世紀になって初めてヨーロッパ人が商業的狩猟を持ち込むまでは、生業としての狩猟しか知らなかったような人々々の場合には、ヨーロッパ人が毛皮獣狩猟を奨励した際、既にそれが資本主義的なシステムへの参入だったのにも関わらず、成功し、それなりの収益をイヌイットにもたらし、彼らの狩猟活動の維持に貢献すらしていたからである。彼らが毛皮獣狩猟による利益を失うのは、ヨーロッパで毛皮の輸入が禁止される一九八三年以降であり、それから彼らは別の生き残り戦略を模索するために苦悩する「岸上 一九九六・二七」。

需給関係による価格決定と自由競争を原則とする資本主義的な市場経済システムのもとでは、千変万化する市場での需要の動きに対応し、しかも生産者あるいは流通者自らが需要の掘り起こしを行わないと、製品は売れず、収益も上げられない。したがって、そのような経済システムのなかで生き残るためには、時間をかけてシステムに適応し、柔軟な経営戦略を立てる必要がある。例えば狩猟産品でも従来需要が高く、高い値で売れた毛皮が、自然保護運動の高まりなどにより人氣が低落すると、たちまち価格が暴落する。それに対しては、自分たちの毛皮獣狩猟が生態系の維持に役に立つなどの宣伝をして需要を喚起したり、毛皮製品により高い付加価値をつけたり、あるいは別の産品の需要を掘り起こしたりなどの努力を常に行っていなければならない。しかし、ウデへたちは二〇〇年近く王朝的経済システムの下にいて保護され、しばらく資本主義の波に洗われたものの、すぐに再びソ連の社会主義的経済システムの下で保護統制されたために、市場経済システムは全く未経験といつてよい状態にある。彼らは今それへの適応過程にあるといえるだろうが、適応に成功するかどうかはまだ予断をゆるさない。しかも、ロシア政府はまだ生き物のように動き回る市場というものを統制できるような状態ではなく、先進資本主義諸国がその国民としている先住民や少数民族に与えているような補償や保護を、ウデへ

たちに与えることはまだ不可能である。

実際に狩猟で生計を立てていようがまいが、ウデへにとつて「狩猟」は最高の社会的威信をもつ活動であり、ウデへとしてのアイデンティティの源泉である。実際に狩人として森のなかで厳しい生活をしている人々は、自分たちの生産物がそのコミュニティの中だけでなく、広域経済システムの中でも高い価値を認められていたことに誇りを持っている。ウデへの狩人にとつて最高の獲物はクマであり、次はオオシカ、イノシシと食用の大型獣がつづくが、毛皮獣も生活を保障する獲物として大切であった。一九九五年、九六年の調査でインフオーマントを務めてくれたササン・ゲオンカ翁は一〇歳で初めて自分で仕掛けた罠でクロテンを捕ったとき、目が不自由だった彼の祖父は捕れたクロテンを手で撫でて確かめながら、これでまた一人家族を養ってくれる狩人が現れたと涙をながして喜んだという。

しかし、これまで彼らの生活を保障してきた毛皮は、もはやその価値が下落してしまった。もちろん食用としてのオオシカなどの肉は彼らにとつては貴重だが、ウデへ以外の人々にとつては、売り物にはならない。つまり、彼らが生産するものの価値が、彼らが参入しようとしている経済システムの中で地に落ちていくわけで、それによつて狩人の誇りが傷つけられているとともに、その存在理由そのものが危うくなっている。採算に関係のない大型獣狩猟を続け、狩猟そのものは一応存続するが、もちろん現在の彼らにとつては、それだけでは生活できない。「狩猟採集民族」と呼ばれ続けてきたウデへは現在、これまでの基本的な戦略を完全に放棄して、全く別の方法で現在のロシアの社会、経済システムに参入するか、それとも、大幅な変更を加えながらも従来の基本戦略に固執するかの大きな岐路に立たされている。

註

(1) 「狩猟採集」という用語は実は不完全なものである。というのは、人類学で呼ばれる狩猟採集民のほとんどが漁撈も行っているからである。また、食糧や日用品などに占める割合では採集で得られるものの方が高いなどの理由から、「採集

狩猟民」という呼び方もしばしば見られる。しかし、本稿ではそのようなことを踏まえて、専ら狩猟、漁撈、採集といった活動で生計を立ててきた人々を「狩猟採集民」、彼らの活動を全般を「狩猟採集」と呼ぶことにする。

(2) 一九九二年の調査は文部省の科学研究費、九五年と九六年

の調査はトヨタ財団の助成を得て行われた。共同で調査にあたった佐藤宏之氏、森本和男氏、田口洋美氏、アナトリー・スタルツェフ氏、マルガリータ・パトルーシエヴァ女史、そして調査地であるクラスヌイ・ヤール村でわれわれの活動に多大な便宜を図ってくれたアレクセイ・ウザ氏とインフオーマントを務めてくれたスサーン・ゲオンカ氏には、この場を借りて深くお礼を申し上げたい。

(3) 「ミオ」とは紙または布に神々の画像を描いたり、名前を漢字で書いたものである。大きさは様々であるが、最も大きいものでも縦四〇センチメートル、横三〇センチメートルほどである。また、クラスヌイ・ヤールの東のピキン川の沿岸にスワンタイ・ミオと称する場所があり、そこに小さな祠が建てられ、奥地に行く狩人たちは必ず礼拝している。祠の中は空であるが、そのようなものも「ミオ」と呼ばれる。どのようなときにミオに礼拝するのかわかっているのはインフオーマントによって説明が異なることがあるが、調査時に最もしばしば聞かされたのは、正月に家の奥の神聖な場所に飾り、酒や食料を供えて礼拝して一年の無事を祈願する、あるいは何か願い事があるときにやはり供えものをして礼拝するというものであった。描かれている神々の姿は明らかに中国(漢族)の民間信仰に登場するものが含まれており、また名前が書かれる際にも漢字が使われているところから、ミオに対する礼拝は中国由来である。ミオとは「廟」に由来することばであろう。なお、ウデへのミオについては先行研究はほとんどな

いが、ウデへの隣族であるアムールのナーナイのミオについては拙論「ナーナイにおけるミオ信仰について」(「佐々木一九九一」)がある。

(4) その他にもウデへの祖先に当たるものが記されているかもしれないが、集落名やハラ(氏族)名から比定することができない。

(5) 牡丹江が松花江と合流する地点の右岸にあった三姓とよばれる町におかれた清朝のアムール、樺太方面支配の拠点。「副都統」とは、東北地方統治の最高責任者だった「將軍」の副官で、三姓にいた副都統は吉林將軍の配下にあつた。衙門とは役所のこと。三姓副都統衙門には副都統の下に軍団を束ねる協領、各軍団の長である佐領、佐領の副官の驍騎校などの職がおかれていた。アムールを下つて毛皮貢納民のもとへ赴き、毛皮を集めて恩賞を配布してくるのは佐領、驍騎校たちの仕事であつた。詳しくは「佐々木一九九六・一一〇」を参照のこと。

(6) 槍や弓矢が使われていたのは、銃が広く普及する以前のことである。それがいつかははつきりとは言えないが、一九九五年に既に八〇歳といわれたインフオーマントのスサーン・ゲオンカ氏が幼少の頃にはまだ槍を使つたクマ狩りや弓矢によるオオシカ猟が見られたということから、一九二〇年代までは確実に槍、弓矢による猟が行われていた。

(7) 秋田の阿仁マタギはサルやイタチなども黒焼きにして薬として売っていたという(「田口一九九四・八四、一一八」)。

江戸時代に日本あるいはその支配地域で毛皮獣狩猟が盛んだったのは蝦夷地すなわち北海道と樺太南部と千島列島である。北海道と樺太ではサンタン人と呼ばれた大陸から来る商人たちへの輸出品として毛皮を必要としていたために、また千島列島では直接中国に輸出するためのラッコの毛皮を得るために、そこを支配していた松前藩や幕府が地元のアイヌたちに毛皮獣狩猟を奨励していた。

(8) クラースヌイ・ヤール村は一九五九年に創立された。フルシチョフ、ブレジネフ時代のコルホースのソフホース化や規模の拡大に伴い、ピキン川流域の狩猟林業関係のコルホースがここに集められ、最終的にはこの村のゴスプロムホースに統一された。この村の一九九〇年代の人口は六〇〇人ほどで、そのうちの八割以上が戸籍上ウデへとされている。しかし、

一九九五年の段階ではゴスプロムホースに所属するプロのハンターはわずか四三人しかいなかった。また、ゴスプロムホースの収入は狩だけでなく、林業、農業、養蜂業などよってもたらされていることから、現状ではこの村は必ずしも「狩猟民の村」とはいえないかもしれない。しかし、やはり毛皮の売り上げが常にゴスプロムホースの売り上げ全体の三割から四割を占め、もつとも重要な生産部門であることには変わりなく、また、秋の漁業や薬の原料となる薬草の採集も重要な産業であることから、この村の主要産業はやはり「狩猟採集」である。ただし、彼らの狩猟採集は常に現金収入や商品「経済に結びついており、既に「生業」のレベルではなく、「産

業」といえる段階にある。

(9) しかし、プロのハンターの数が少ないからといって、高級毛皮や高級薬剤原料をえるための狩猟採集活動が、この村の経済戦略からはずされたわけではない。註(8)でも指摘したように、この村の経済は材木とともに毛皮と薬剤原料が支えていることには変わりない。狩猟採集活動がゴスプロムホースにもたらす収益はそこで働く人々だけでなく、間接的には教員や役場の職員などの公務員(村にはゴスプロムホースか公務員、あるいは公共事業による臨時の雇用ぐらいしか就職口はない)や、村の人口の大きな部分を占める年金生活者など他の人々にも還元されている。

参考文献

- 安斎正人・佐藤宏之 一九九六 「アキビラ猟の空間構造」——岩手県沢内村での罾猟の調査『先史考古学論集』第5集。
 叢佩遠・趙鳴岐(編) 一九八五 「曹廷杰集」北京 中華書局
 傅恒 一九九一 「皇清職貢圖」瀋陽 遼瀋書社(原典は一七六一年完成)。

岸上伸啓 一九九六 「カナダ極北地域における社会変化の特質について」スチュアートヘンリ(編)『採集狩猟民の現在』言叢社。

Крышнов, А.И. 1989 *История и культура устьевцев*, Наука.

Ленинградское отделение, Ленинград.

- Даркин, В.Г. 1958 Удэгейцы, Академия Наук СССР, Сибирское отделение, Дальневосточный Филиал, Владивосток.
- LEE, Richard B., DE VORE, Iven, 1979 *Man the Hunter*, Chicago, Aldine. (seventh printing, first published in 1968)
- 1979a "Introduction", LEE, R. and DE VORE, I. ed. *Man the Hunter*, Chicago, Aldine. (seventh printing, first published in 1968)
- 遼寧省檔案館・遼寧社會科學院歷史研究所・瀋陽故宮博物館(編) 一九八四 『三姓副都統衙門滿文檔案編』瀋陽 遼寧書社。
- 間宮林蔵 一九八八 「北夷分界余話」洞富雄・谷澤尚一(編) 『東韓地方紀行』平凡社東洋文庫 平凡社
- PETERSON, Nicolas 1991 Introduction, Peterson, N. and Matsuyama, T. (ed.), *Cash, Commodification and Changing Foragers* (Senri Ethnological Studies, No.30), National Museum of Ethnology. Подмасьин, В.В. 1991 *Духовная культура удэгейцев*. Издательство Дальневосточного университета. Владивосток.
- 佐々木史郎 一九九〇 「アムール川下流域諸民族の社会・文化における清朝支配の影響について」『国立民族学博物館 研究報告』一四卷三号 国立民族学博物館。
- 一九九一 「ナナイにおけるミオ信仰について」黒田信一郎・津曲敏郎(編) 『ツングース言語文化論集』1 北海道大学文学部。
- 一九九六 「北方から来た交易民 絹と毛皮とサントアン」日本放送出版協会。
- Пренк, Л. 1899 *Об Инородцах Амурского Края том 2*. Издание Императорской Академии Наук, Санкт Петербург.
- Сивильс А.Ф. 1996 *Материальная культура удэгейцев*. Дальневосточное Отделение Российской Академии Наук. Владивосток.
- スチュアート ヘンリ 一九九六 a 「序」スチュアート ヘンリ(編) 『採集狩猟民の現在』言叢社。
- 一九九六 b 「現在の採集狩猟民にとつての生業活動の意義——民族と民族学者の自己提示言説をめぐって」スチュアート ヘンリ(編) 『採集狩猟民の現在』言叢社。
- 田口洋美 一九九四 『マタギ 森と狩人の記録』慶友社。
- 楊寶 一九八五 『柳邊紀略』『遼海叢書』第一冊(影印本) 瀋陽 遼瀋書社。
- (ちちき・しろう 国立民族学博物館助教授)